

2016年10月2日 主日礼拝説教(要旨)

聖書：ルカによる福音書 16章 1～13節

説教：「不正の中の真実」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ルカによる福音書 16章の冒頭にある「不正な管理人」のたとえ話は、主イエスの語られた多くのたとえ話の中でも、ひとときユニークなものでしょう。抜け目のない男の話ですが、主イエスの口からは、彼の行動を非難するような言葉や、世の不正を嘆く言葉は一切出ることがありません。これは弟子たち向けに語られたたとえ話です。主イエスは、ぼんやりしている弟子たちをハッと目覚めさせるような話をあえてなされたのかもしれない。もし、このたとえ話に道徳的な教訓とか知恵を期待して読むと、さっぱりわけが分からなくなってしまうでしょう。私たちはこの独特のたとえ話の急所を注意深く聴き取っていきたいと思います。

たとえ話に登場する管理人は、ある金持ちの主人に仕え、その財産を預かり、取引等をすべて任されていた人のようです。けれども、長年の慣れと気の緩みから、いつしか相当に無駄遣いするようになってしまい、それがついに主人の耳に入って呼び出されたのです。「会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない」(2節)。この管理人は、しかしそこで姑息な弁解や自己弁護をするのではなく、これでもう首になることをあっさり覚悟して、この家を追い出された後、どうしたら自分が路頭に迷わずにすむかということだけを知恵をしばって考えたのです。そこで彼は、主人から借りのある人たちを呼び、自分の職務権限で、油百バトスを五十バトスに、小麦百コロスと八十コロスにという具合に借用証書を書き換えさせ、借金を減免してやるのです。無駄遣いをしたあげくに、最後の最後になって主人の損害をもっと大きくしてしまうのです。しかし、こうしておけば、借金をしていた人たちが自分に少しは恩義を感じて、助けてくれるだろうと考えたのです。

すると、主人はこの不正な管理人の抜け目のないやり方をほめたとあります。そんな主人がいったいどこにいらっしゃるのでしょうか。あまりのことに怒りを通り越して呆れ果てているのでしょうか。しかし、大事なことは、主イエスもまたこの抜け目のない管理人の振舞いを肯定的に弟子たちの前に差し示して言われるのです。「この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている」(8節)。ここには、実に世俗的で愚かな私たち人間の営みを余裕とユーモアをもって受けとめていてくださる主イエスがおられます。

それにしても、いったいこの不正な管理人の何が私たちの模範となるのでしょうか。改めて彼の行動の特徴に注目してみましよう。彼が賢いのは、まず、首になるまでのほんのわずかな時間をフルに活用したこと、次に、自分の預かっていた財産と特権をわずかの間にフルに用いたこと、さらに、過去のつじつま合わせを一切放棄し、後ろのことは一切顧みないで、自分を助けてくれる友だちを作ることだけを考え、それにすべてを賭けたことです。ともかく、彼の賢さは中途半端ではありません、ずる賢さに徹して、自分の味方となる友だちを作ろうとしたのです。

私たちのことを「光の子」と呼んでくださる主イエスは、この「不正な管理人」に代表されるこの世の子らの賢さを例にあげて、「不正にまみれた富で友だちを作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる」（9 節）と言われます。大事なのは役に立つ友だちです。けれども、それはこの世の友だち作りではありません。今のうちに作るべき友だちとは、私たちが永遠の住まいに迎え入れてくれるような友だちです。私たちが永遠の住まいへと迎え入れてくれる友だち、それは私たちのことを友と呼び、「わたしの父の家には住む所がたくさんある」（ヨハネ 14：2）と約束してくださった主イエス・キリストです。私たちが、神の前にこれまでいかにわがまま勝手であり、神から預かった賜物を正しく活用せず、浪費してきたりしてきたにせよ、神のもとから私たちのために来られたイエス・キリストを、なりふり構わず、私の友、私の救い主とすることです。キリストとの関係を今この残された時の間にしっかりと作っておくことです。このキリストの憐れみと赦しに支えられて、私たちはありのままの自分として、神の前に立ち、光の子として、神と隣人に仕えて行くことができるのです。

不正な管理人はあくまでも前向きでした。後ろ向きの余計なことはしなかったのです。ところで、このような一途さをもって、闇の世界ではなく、光の世界を走り抜いた人を私たちは知っています。使徒パウロです。主イエス・キリストに捕えられて新しい歩みを始めたパウロは、今や福音宣教にすべてを賭ける自分の生き方をこう表現しています。「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」（フィリピ 3：12～14）。私たちはそのような走りをしているでしょうか。

主イエス・キリストによって罪を赦され、光の世界に招き入れられ、終わりの日の救いの完成を約束されているのに、すぐに後ろを振り返り、自分の成し得た少しのことで驕り高ぶり、自分の成し得なかった少しのことで卑下していないでしょうか。主イエス・キリストはちの罪を贖い、私たちの過去を担い、私たちそれぞれの人生を、責任を持って最後まで導いてくださるお方です。そのことを信じて生きるあなたがたは、この世の子らよりももっと賢くなってよいではないか、と主は言われるのです。光の子どもとして、心を高く上げ、体を伸ばすようにして、私に従ってきなさい、と主は私たちが招いてくださっているのです。